

世界を魅了する二人が共演！

児玉 桃

(ピアノ)

Interview

セルゲイ・ハチャトゥリアン

(ヴァイオリン)

とのデュオを語る



児玉 桃(ピアノ) Momo Kodama, piano

芸術文化センターにはソロ、室内楽、協奏曲と様々なかたちで来演し、常に好評を博してきたピアニストの児玉桃さん。

今回は、アルメニア出身のヴァイオリニスト、セルゲイ・ハチャトゥリアンさんとのデュオ・リサイタルが、9月に開催されます。

公演について、お話をうかがいました。

幅広いレパートリーと豊かな表現力で高い評価を得るピアニスト。国際的な演奏活動のほか、エリザベート王妃国際、ショパン国際等の世界的コンクールで審査員を務め、現在はカールスルーエ音楽大学で教鞭を執るなど、後進の指導にも力を注いでいる。パリとドイツ・カールスルーエに在住。



プロムナード・コンサート

セルゲイ・ハチャトゥリアン&児玉 桃 デュオ・リサイタル

9/6(日) 2:00PM開演 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール A ¥3,000 B 売切

プログラム

J.S.バッハ：ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第2番

バグダサリアン：狂詩曲(ヴァイオリンとピアノ版)

ラヴェル：ツィガーヌ

フランク：ヴァイオリン・ソナタ イ長調

ハチャトゥリアンさんは一音一音にこだわり、絶えず追求し続けるヴァイオリニスト

—— 今回のデュオ公演は、児玉さんの念願だったそうですね。

ハチャトゥリアンさんのことは、彼が2005年にエリザベート国際コンクールで優勝した頃から、音楽への熱情が素晴らしいヴァイオリニストだと感じ、興味を抱いていました。共演の機会はなかったのですが、3年前、私が独カールスルーエ音楽大学の教授に就いた時に、ちょうど彼も同じように教授になって、会議で初めてお会いしました。一緒に演奏できればいいねと話していたものの日程が



セルゲイ・ハチャトゥリアン (ヴァイオリン) Sergey Khachatryan, violin

2000年シベリウス国際コンクールで史上最年少優勝を果たし、2005年エリザベート王妃国際コンクールでも第1位を受賞。世界的なソリストとしての地位を確立し、欧米やアジアの主要オーケストラに多数客演するほか、録音も高く評価されている。

合わず、今回の日本公演でようやく共演が実現します。

—— ハチャトゥリアンさんのヴァイオリニストとしての魅力はどのようなところでしょうか？

深い、広い歌が心の底から溢れ出て、腕を通して流れて弓とヴァイオリンに注ぎ込まれ、ヴァイオリンからお客様に届くマジックな流れにいつも感動します。それと同時に、一音一音を考え抜いているというだけでなく、とことん感じ取って演奏されていて、追求をやめない。自分のしたい音楽への強いこだわりを感じます。

お人柄としては、とても熱い方ですが、一方で冷静な面もあり、時折ユーモアも交えられる、ユニークなキャラクター。また、家族思いの愛情深い方。それは音楽にも言えることで、こだわりの強さは音楽への愛情の深さの表れなのだと思います。

—— 今回のプログラムは、どのように決められたのでしょうか？

ハチャトゥリアンさんはプログラムに対しても突き詰められる方ですから、二人で随分話し合いました。

選曲にあたっては、まずフランクのソナタをプログラムの軸に据えました。それぞれ、これまでに何度も弾いている曲ですが、ピアノもヴァイオリンも大事な役割がある大曲ですので、デュオをやるからには絶対に弾きたい、と。そこから他の曲を検討しました。

1曲目のバッハについては、やはり“音楽の父”のような作曲家ですから演奏会の始まりに似つかわしい。それに、バッハからの流れで、オルガニストでもありハーモニーの豊かな音楽を書いたフランクで締めくくすることで、統一感を持てます。

裏面に続く

音楽から色々な風景が見えてくるような、イメージーション豊かなプログラム

—— 2曲目のバグダサリアンはハチャトゥリアンさんの出身地アルメニアの作曲家ですね。

この「狂詩曲」は民謡にルーツを持っており、「アルメニアの魂を歌っている」とハチャトゥリアンさんはおっしゃいます。実は私は、彼に紹介されるまでこの曲を知らなかったのですが、楽譜を見てとても良い曲だと感じました。アルメニアのリズム感などは彼に教えてもらうことも多いと思いますが、私も新鮮な眼で見て、お互いのアイデアを交換できればと思います。

バグダサリアンは映画音楽も書いていて、この「狂詩曲」に関しても、音楽から画が見えてくるような作品です。

同様に、3曲目のラヴェル「ツィガース」も民謡的な“^{ラブソディ}狂詩曲”です。こちらは、ハンガリーのロマ音楽を、ラヴェルの言葉で語った楽曲。2曲とも“景色が見えてくるような”作品です。

—— ラヴェルとフランクは、それぞれバスク地方とベルギーの生まれながら、どちらもパリを拠点にした作曲家ですね。パリに長らく住まれている児玉さんから見て、彼らの音楽のフランス的な面はどこにあるのでしょうか？

ラヴェルは、「ツィガース」ではロマ音楽を扱っているのですが、他の楽曲ほどフランス的な面が強いわけではありませんが、それでも民謡的な要素と彼らしい優雅さとの興味深い混ざり合いが感じられます。この曲はゆっくりとしたメロディから始まり、だんだん早くなってわくわくするような躍動感がありますが、同時にラヴェル独特の優美なハーモニー、色彩感を纏っています。

また、ラヴェルはディテールへのこだわりが強い作曲家です。彼が暮らしたパリ郊外の家に行ったことがあります。家のインテリアにしても細部に気を遣っていて、それらを一つにまとめて創りあげ

ている。そういった細部への意識が、彼の音楽の優雅さ、繊細さに通じています。

フランクは、和声感が強く建築的な音楽が特徴ですが、それでいて色合いが美しく、表現がとても優雅です。このソナタは親友イザイの結婚式に捧げられた楽曲でしたから、幸福感や情熱も感じられます。

また、この曲はプルーストの小説「失われた時を求めて」に登場する曲のモデルの一つと見なされているのですが、それだけ豊かな情感にも溢れています。そういった点では、演奏会全体を通して、色々な風景が見えてくるような、イメージーションが豊かに広がるプログラムになりました。

—— 聴く私たちにも、多彩な出会いがありそうなプログラムですね。

素晴らしい音楽に出会うことによって自分の中の何かが変わり、世界を広げることができる、音楽はそのような見えない力を秘めています。今回は変化の多いプログラムですし、想像し、音楽を通して何かを発見する喜びを、あらゆる世代の方に体験していただきたいですね。

また室内楽の面白さは、お互いの音を聴きあって音楽で会話すること、そして並行に歩いて音楽を創りあげていくことにあります。これからリハーサルを重ねて、ハチャトゥリアンさんと色々なアイデアを交換できることを私も楽しみにしています。そうして創りあげる音楽、コンサートのライブ感を皆さまにも楽しんでいただければと思います。

—— ありがとうございました！



現在、フランス・パリとドイツ・カールスルーエの二拠点で生活している児玉さん。両国の文化的な違いについてもお話しくださいました。

カールスルーエはフランスとの国境に近く、パリからは高速鉄道で2時間半程度の距離ですが、やはり文化的には違いがあります。

音楽大学で教えていて感じるのは、ドイツではベートーヴェンやシューマンなど自国の作曲家の音楽に対するこだわりが強いということ。また音楽に限らず、ドイツ人は表現がダイレクトで、理想を求めるロマンチストのような面が濃いかもかもしれません。

一方フランス人は、言い切らず提案するような話し方が多いです。それが音楽にも表れていて、感情をあらわにせず、ほのめかすようなところがあるように思います。また、美的感覚に敏感で、柔軟性があります。そして、例えばパンとチーズと安いワインしかなくても、野の花をテーブルに飾って生活を美しく彩る、というように、フランス人は人生を楽しむのが本当に上手です！